

あなたと博物館

松本市立博物館ニュース No.223 2019.7.1

旧開智学校校舎が 国宝に指定されます!



令和元年(2019)5月17日、国の文化審議会が文部科学大臣に旧開智学校校舎を国宝に指定するよう答申しました。今後、官報告示を経て正式に指定される予定です。

- もくじ
- 誌上博物館 ◇ 旧開智学校校舎 国宝指定の答申について……………2-3
 - 誌上博物館 ◇ 山辺学校にみる開智学校の影響……………4-5
 - 博物館のノートから ◇ 蚕の飼育展示について/
『松本高等学校開校100年記念誌』について……………6
 - 博物館TOPICS ◇ 松本高等学校開校100年記念展/まつもとの七夕2019…………7
 - 博物館TOPICS ◇ 生誕150周年記念企画展「『木下尚江』という生き方」…8
 - ガイドコーナー ◇ はんでんぼく……………8

美しく生きる。
健康寿命延伸都市・松本

旧開智学校校舎 国宝指定の答申について

旧開智学校校舎が国宝に指定される見込みとなりました。近代の学校建築としては初めての国宝指定です。今回の誌上博物館では、県内の建造物としては66年ぶりとなる国宝指定が実現した理由、主に評価された点について紹介します。

1 国宝指定基準

旧開智学校校舎の国宝指定の答申にあたっては、近代化を推進した開化期の洋風建築受容を示す擬洋風建築を代表し、近代教育の黎明を象徴する最初期の学校建築として、深い文化史的意義を有していることが評価されました。また、設計施工を手がけた大工棟梁立石清重による独創性豊かで極めて優れた意匠や、全国の擬洋風校舎と比べて特に高い完成度と先駆的な計画を実現している点などが評価されています。

近年、確認された資料により、設計過程や洋風意匠の摂取の様子が詳細にわかり、現存していない東京などの洋風建築の特徴を伝えている点も価値を高めたポイントとされました。

このように評価された旧開智学校校舎の価値の詳細について、以下で調査研究の成果を交えながら項目ごとに紹介します。

2 擬洋風建築の代表作

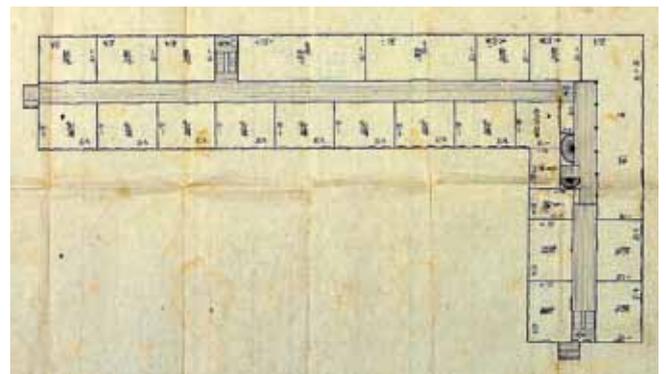
旧開智学校校舎は、文明開化の時代に日本の大工による洋風建築の受容の様子をよく示す擬洋風建築の代表作として評価を得ています。和風や洋風など様々な建築要素が混ざっている擬洋風建築ですが、旧開智学校校舎の場合は立石清重による東京や横浜での洋風建築の調査成果が反映されており、都市部の洋風建築の要素をよく引用しています。全体の形は東京にあった開成学校を参考にしましたが、塔屋のデザインや様々な意匠を重ねていく手法は東京日本橋にあった国立第一銀行と類似しています。ほかにも、擬洋風建築によくみられるコーナーストーン状の漆喰模様や銀座煉瓦街のインパクトから生まれた「煉瓦塗」と記されるペンキ塗りの手法が用いられています。

そして、旧開智学校校舎を象徴するのが、正面の竜と天使の看板です。和と洋の相反するデザインの競演というだけでなく、竜は隣の寺院からの転用、天使は『絵入東京日日新聞』のタイトルのデザインからの引用というように、手に入るもの、目に入ったもの全てを取り込んで成り立っている

姿は、まさに文明開化の時代の人々の気概を伝えているといえます。それにもかかわらず、一つの建物として破綻しないプロポーションにまとめられている旧開智学校校舎は、高い独創性と建物としての美しさを両立した、まさに擬洋風建築の代表作といえる建物です。

3 近代教育の象徴

近代教育の黎明を象徴する校舎として評価を得た旧開智学校校舎ですが、近代教育を確立した「学制」で示された教育の理想像を体現した校舎と評価されています。例えば、学制の規定では、小学校は下等小学と上等小学に分かれて、それぞれ8級～1級まで進級・卒業することになっていました。また、各等級で内容の異なる教育を多人数に一斉に行う一斉教授を基本とし、試験による厳格な進級制度などが定められました。近年新たに確認された旧開智学校校舎の部屋割図により、下等・上等小学合わせて16等級の児童を収容するのに十分な教室数や広い試験所を最初から確保していたことが判明しました。部屋の不足によって複数の等級の児童を一緒に授業しなければいけないといった事態に陥ることなく、理想的な教育環境を実現していたことが明らかとなったのです。



創建当時の開智学校2階平面図

4 校舎としての完成度と先駆的な計画性

調査研究事業の中では、全国の擬洋風校舎との比較から、旧開智学校校舎の優れている点を探ってみました。注目したのは小学校の校舎としての機能です。明治10年代から30年代にかけて、徐々に学校校舎の規格が整えられていきます。特に明治33年(1900)の「小学校設備準則」で定められた規格がその後100年以上にわたり、小学校校舎の基本形になったとされています。明治9年に竣工した校舎を、この準則と比較すると項目の

7割以上をクリアしていました。明治初期に建てられた学校校舎には、廊下がなかったり教室の大きさがバラバラになっていたり、授業には不便な造りのものが多くありました。そうした中、旧開智学校校舎は明治一桁の時代に、32室もある教室を廊下でしっかりと区切り、職員室や講堂、傘履物置場など部屋の種類も非常に多く、校舎としての完成度が高いことが分かってきました。また、教室は全て3間×4間の大きさに統一され、天井高は10尺となっていますが、これは明治33年の準則の規定をすべて満たしています。日当たり面など規定を満たしていない点もありますが、竣工から20年以上後の規格にも適合するほど先駆的な計画性を持っていたことは、同時代の他の校舎と比較した際に際立って優れている点といえます。

5 開智学校の設計過程

近年、新たに存在が確認された立石清重の図面類から、旧開智学校校舎の設計過程が明らかになりました。明治9年4月の竣工時には総2階建てのL字型の形となりましたが、当初はそれとは異なる形を検討していました。設計途中の平面図をみると、現存する本館部分の背後に平屋の棟が3棟並ぶ形で描かれています。竣工時とはずいぶん様子の異なる計画ですが、この棟の並び方は開成学校とよく似ています。これまでも開成学校を参考にしたことはわかっていたのですが、車寄など校舎のデザインの一部が引用されたのだと考えられてきました。今回の調査によって校舎の全体的な形も開成学校を参考に設計されたことが分かりました。また、その後の設計変更で本館の背後に3棟並ぶ形からL字型2階建てへと変更された、という設計の過程も詳細に追えるようになりました。ほかにも、屋根の上に載る塔屋も後から追加

されたものであること、当初は現存する校舎よりさらに大きく作ろうとしていたことなど、新しい資料から多くの事が明らかになりました。

6 守り伝えられてきた校舎

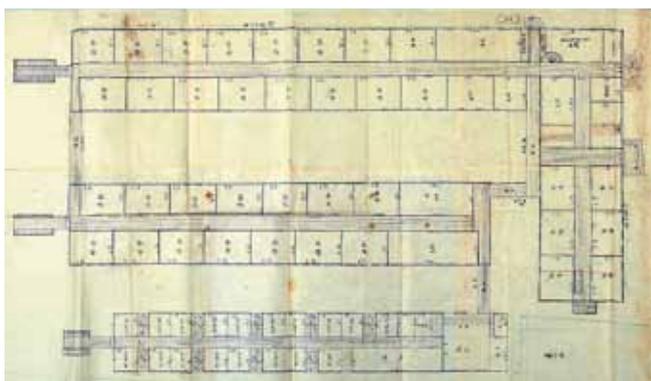
このように、調査研究の成果によって明らかとなった点が校舎の価値を高め、国宝の指定に足ると評価されるに至りました。今回の調査研究には、末尾に挙げた方以外にも多くの方にご指導・ご協力をいただきました。多くの人に支えられて国宝へのステップをあがろうとしている校舎ですが、やはり重要なことは140年以上前の校舎を大切に保存し続けてきたことであると感じます。明治30年代から開智学校の教員や地域の人々に校舎を大切にしようという意識が生まれていましたが、これは近代建築の保存意識の起こりとしては非常に早い事例です。この意識がこれまで多くの方々を受け継がれてきたからこそ、何度も水害などの被害にあいながらも校舎が保存されてきたといえます。現在でも、隣にある松本市立開智小学校の現役の児童による清掃が行われています。こうした校舎への思いの積み重ねが国宝化へと導いてくれたのだと思います。



松本市立開智小学校の児童の清掃活動

- 旧開智学校校舎における調査研究事業では、下記の方々をはじめ多くの方にご指導・ご協力をいただきました。この場を借りて感謝の意を表します。(敬称略)
- 清水重敦（京都工芸繊維大学教授）
 - 小野雅章（日本大学教授）
 - 西澤泰彦（名古屋大学教授）
 - 梅干野成央（信州大学准教授）

(重要文化財旧開智学校校舎／学芸員 遠藤正教)



開智学校設計図

山辺学校にみる開智学校の影響

今年の4月27日にリニューアルオープンした旧山辺学校校舎（以下、山辺学校）。耐震化工事に伴い休館していた「山辺学校歴史民俗資料館」を、従来の教育文化センターの附属施設から松本まるごと博物館の分館に位置付けを改め、展示内容を大きく見直して開館しました。

山辺学校の魅力は、なんとといっても、このたび国宝に指定されることとなった旧開智学校校舎（以下、開智学校）と同じ明治時代の学校建築であり、多くの類似点があることです。松本市内に残るこの2つの歴史的校舎を見比べることで、開智学校の影響の大きさを感じることができます。

開智学校と山辺学校

開智学校は、明治9年（1876）に大工棟梁の立石清重によって建てられました。一方、山辺学校は、明治18年に大工棟梁の佐々木喜重によって建てられています。佐々木は、立石のもとで開智学校の建設に携わっており、そのため2つの校舎がよく似ていると考えられています。

実際、2階建てで横長の建物や石積み風に仕上げた漆喰塗りの外壁、中央に配置した玄関と屋根に乗せた手すり付きの八角塔など、多くの類似点がみられます。また、建物中央に十字に廊下を配しその両側に教室を配置した1階の間取りなど、内部にも共通点を見ることができます。



旧山辺学校校舎 正面

山辺学校の所蔵資料に、当時の役場職員が残した建設経過の記録があります。ここには「和洋折衷」「洋風模擬」の校舎建設を目的として地元大工の佐々木喜重に依頼したことが記されています。また、佐々木が役場に提出した建築仕様書からは、壁は「煉瓦風に石目をつけ」、八角塔の屋根は「ブリキにてペンキ塗り」にするなど、洋風意匠を取り入れたことが分かります。「和洋折衷」の校舎を依頼された佐々

木は、自身の経験から、開智学校をイメージして山辺学校を建てたと考えられ、当然、地域住民も開智学校のような校舎を期待していたのではないのでしょうか。

それでも、開智学校を完全にまねることはできませんでした。大きな理由は費用です。当時、学校は地元住民の負担で建設されました。松本藩の旧城下町に建てられた開智学校は、学区内の人口が12,000人以上もいたため、それなりの経済力があつたと考えられます。一方、山辺学校は松本の中山間地の山辺地域に建てられ、学区内人口は開智学校の半分程度。当然、経済力は比べるべくもありません。当時の資料から2つの校舎の建築単価を算出すると、開智学校が4.19円/㎡であるのに対し山辺学校は2.54円/㎡となり、大きな差がありました。そのため、山辺学校では、石積み風の外壁を正面のみにするなど、装飾を減らすことで経費削減を図った工夫が随所に見られます。



旧山辺学校校舎 背面

そうしたなかで、八角塔や石積み風の外壁を設けていることは注目すべき点です。これらは、材料費や人件費のかかる装飾であり、経費圧縮のために削られてもおかしくありませんでした。なぜ、経費をかけてまでこの2つの装飾を施したのか。それは、この2つが開智学校の外観の特徴であり、開智学校に似せるためにどうしても必要だったためだと考えられます。仮にこの2つがなければ、山辺学校はどこにでもあるような木造建築となってしまいます。山辺学校には、限られた予算でなんとか開智学校に似せたいという山辺の人々の非常に強い意志が感じられます。それと同時に、それほどまでに山辺の人に強烈な印象を与えた、開智学校の影響力の大きさを感じずにはられません。洋風建築を知らない人々が開智学校を初めて見たときの驚きは、想像を絶するものだったに違いありません。

山辺学校を読み解くことで、開智学校が周辺に与

えた影響の大きさを知り、これまでと違った視点から開智学校の価値や魅力を認識することができます。

旧山辺学校校舎の展示

山辺学校は、昭和3年(1928)まで校舎として使用され、以降は、役場庁舎や公民館、保育園として利用されながら地元で親しまれてきました。昭和56年からの大規模な保存復元工事を経て、翌年に地域の歴史・文化を展示する教育施設「山辺学校歴史民俗資料館」として開館し、昭和60年に長野県宝に指定されました。平成27年度からは耐震化工事を実施し、今年の4月27日にリニューアルオープンしました。

今回のリニューアルにあたり、これまでの年代の古い順番に生活道具を展示する手法を見直し、この建物と地域の特徴を分かりやすく伝えられるよう、テーマに沿った展示手法としました。具体的なポイントは次のとおりです。

1つ目は、歴史的建造物としての価値を分かりやすく伝えることです。開智学校との比較によって建築的特徴を明らかにするとともに、学校建築の多様性をお楽しみいただくため、長野県内の10件の明治期学校建築をパネルで紹介しています。2つ目は、校舎としての雰囲気演出することです。そのために、博物館でよく使用されるスチール製の展示ケースを使用せず、かつて市内の小学校の展示室で使われていた木製ケースを補修して利用しました。また、展示資料数を意図的に減らし使用する展示ケースを減らしました。これにより、この建物が本来持っている明治期の学校の雰囲気を最大限に活かした展示となっています。3つ目は、地域のフィールド(現場)へ来館者を誘うことです。山辺地域に豊かに残る山城や石造物、民俗行事、祭りを紹介するとともに、近世以降の林業、藍生産、製氷業、ブドウ栽培など産業の変遷とその背景にある生活の変化についても紹介しています。これらには可能な限り地図や写真を付けることで、「少し足を伸ばして現場を見に行こうか」と思わせ、施設とフィールドを効果的に結びつけることを意図しました。

個別のテーマでは、新たな視点として戦争を取り上げました。戦時中、山辺地域の温泉地に東京の小学校が疎開していたことや、山辺学校の近くに戦闘機を作るための半地下工場が建設されたこと、そして、これを狙って爆撃が行われその被害状況が学校の日誌に記録されていることなど、山辺地域は松本

市内でも戦争との関わりが深い地域です。実際に投下された爆弾の破片などを展示することで、戦争が遠い場所での出来事ではないことを実感していただくとともに、平和の尊さを考える機会になればと考えています。



旧山辺学校校舎 展示室

歴史的建造物をつなぐ松本まると博物館

今回、山辺学校が松本まると博物館の分館施設に新たに位置付けられたことで、松本まると博物館の施設は16館になりました。そのなかには、開智学校のほか、国の重要文化財に指定される江戸時代末期の民家建築「馬場家住宅」や、同じく重要文化財の旧松本区裁判所庁舎など信州の近代建築を移築した「歴史の里」、明治時代の西洋館「旧司祭館」、松本藩の武家屋敷「高橋家住宅」といった、歴史的建造物を保存公開する施設があります。

今後、相互に連携して調査研究を進展させるとともに、各施設が拠点となって地域に残るその他の歴史的建造物にも光を当てていくなど、「建築」を軸とした事業展開が期待できます。こうした活動の積み重ねが、市域全体を「屋根のない博物館」とし、市民との関わりをなかで地域の自然・歴史・産業の遺産を活用しながら地域振興に寄与するという「松本まると博物館構想」の具現化へとつながっていくものと考えています。それと合わせて、建物を適切に保存管理・活用しながら、国宝の松本城や重要文化財の旧松本高等学校も含め、これだけ多くの文化財を保存してきた「文化財を大切にす松本市民の気風」を、松本のアイデンティティとして後世に引き継いでいくことも大切です。

「建築」をテーマに博物館と地域を巡ると、これまでと違った松本の姿が見えるかもしれません。松本まると博物館で、新しい博物館巡りをお楽しみください。

(松本市立博物館 学芸員/千賀康孝)

松本市歴史の里 Tel.0263-47-4515

蚕の飼育展示について

歴史の里で保存・公開している歴史的建造物5棟のうち、2棟は蚕糸業に関するものです。

その2棟は、製糸業が発達し始めた明治から大正にかけて、野麦峠を越えて飛騨地方と諏訪・岡谷地方の製糸工業を行き来する工女達が大勢宿泊した「工女宿宝来屋」と、下諏訪町で平成7年（1995）まで操業していた繭から糸を取る製糸工場「旧昭和興業製糸場」です。宝来屋は、宿屋廃業後、養蚕も行っていました。

宝来屋は大正初期に宿屋を廃業、昭和興業製糸場は大正14年（1925）の創業（創業当時は別の会社）と、実際には営業時期の重なることは無かった2つの建物ですが、製糸工場で働くために大勢の工女たちが宿泊し、後に養蚕も行った宿屋と、工女たちを迎えた地で操業していた製糸工場が歴史の里の中に並んで建っています。

そんな養蚕から製糸までの一連の営みに関わった建物の姿を結びつけ、蚕糸業の流れを具体的に感じていただくための試みとして、昨年、7月下旬から9月中旬にかけて、歴史の里において蚕の飼育展示を行いました。飼育場所は、宝来屋の“いどこ”の一角とし、かいこかこ当館が所蔵する養蚕に関する民具、きゆうぞう蚕籠・かいこあみ桑くれ台（給桑台）・まよし蚕網・まよし蔴の4点を使用し、

旧制高等学校記念館 Tel.0263-35-6226

『松本高等学校開校100年記念誌』について

旧制高等学校記念館では、松本高等学校開校100年を記念し、『松本高等学校開校100年記念誌』を作成しました。記念誌には、松本高等学校時代の思い出として、松本高等学校出身の16名の方々よりご寄稿いただきました。

ご寄稿いただいた文章を拝読すると、勉強だけではなく、部活動や登山、友人との深い交友など、青春を満喫していた日々の諸相が感じられます。

明治19年（1886）から昭和25年（1950）まで存在していた旧制高等学校は、高度な教育を受けるために作られた学校制度でした。旧制高等学校の学生たちは、帝国大学への進学の特権を与えられていたため、大学受験のための勉強以外にも青春を満喫することができました。自分の好きなことや部活動に打ち込み、友人と生涯に渡る友情を築き、教授と人生を通じた関わりをすることで、自己の能力の可能性を探究する場となっていました。そのような自治と並んで、弊衣破帽のバンカラも旧制高等学校の特

かつて養蚕を行っていた宝来屋の往時の情景を再現するよう努めました。

想定外だった夏の暑さへの対策など試行錯誤を繰り返しながらの飼育とはなりましたが、ご覧になった方々から、「生まれて初めて蚕を見た」、「子供の頃、家でも飼っていた。毎日の桑やりが自分の仕事だった」など、多くの感想や蚕にまつわる思い出をお聞きすることができました。

歴史の里では、今年も蚕の飼育展示を行います。生き物を飼うという責任と難しさはありますが、「お蚕さま」を通して、貴重な歴史的な建物のかつての姿と、信州の蚕糸業を支えた人々の息吹を身近に感じていただければ幸いです。

（松本市歴史の里 学芸員 / 八木瑞希）

【蚕の飼育展示】

【期 間】5月下旬～9月中旬（予定）

【場 所】歴史の里 工女宿宝来屋

※気候や蚕の状態によっては、予告なく期間の変更や展示の中止が生じる可能性があります。



昨年の飼育展示の様子



飼育中の蚕(昨年8月)

徴でした。バンカラは、世間の虚飾を排し、内面の充実をもって尊しとする青年の心意気を示そうとするものでした。

『松本高等学校開校100年記念誌』においても、松本高等学校出身の方々の経験から、魅力的な青春の日々を感じることが出来ます。また、この記念誌を作成するにあたり、何名かの松本高等学校出身の方々に実際にお会いし、お話をお伺いする機会がありました。皆さんとてもチャレンジ精神のある素敵な方ばかりで、お話も面白く勉強になりました。私も、皆さんのようにもっとさまざまなことに挑戦していきたいと思えます。

今年は、松本高等学校開校100年を記念して、他にも企画展やイベントを行います。ぜひ、この機会に旧制高等学校記念館へお越しいただき、松本高等学校出身の皆さんの思いや青春の日々に触れてください。

（旧制高等学校記念館 学芸員 / 石原花梨）



松本城と松本高校生

旧制高等学校記念館 Tel.0263-35-6226

松本高等学校開校100年記念展

松本高等学校は、明治32年(1899)から始まった長い誘致運動の結果、大正8年(1919)に開校しました。よって、令和元年(2019)は、松本高等学校が開校して100年の年になります。

今回の企画展では、松本高等学校開校100年を記念して、松本高等学校の歴史及び、同時期に開校した新潟・山口・松山高等学校の歴史を紹介いたします。さらに、新潟・山口・松山高等学校関連資料の借用を行い、普段は松本で見ることができない資料を、ご覧いただける企画展となっています。借用資料は、それぞれ順に、期間を区切って展示する予定です。8月3日(土)～9月16日(月・祝)が新潟、9月25日(水)～11月4日(月・祝)が山口、11月12日(火)～12月22日(日)が松山になります。是非会期中は何度も足をお運びいただき、貴重な資料をご覧ください。

また、企画展開催中はバンカラ衣装の無料貸出を



松本高等学校校舎(大正11年発行『落成記念帖』より)



バンカラ衣装を着て、こんな感じに写真が撮れます!

行います。(※着用は、旧制高等学校記念館・あがたの森文化会館館内のみで、1組2名まで)バンカラになって、旧松本高等学校校舎で写真を撮ることで、ぜひ旧制高等学校を体感してください。

(旧制高等学校記念館 学芸員 / 石原花梨)

[会 期] 8月3日(土)～12月22日(日)
午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日…月曜日(祝日の場合は翌日休館)
9月18日(水)～9月23日(月・祝)、11月6日(水)～11月10日(日)
●は展示替えのため常設展示のみ開館。

[会 場] 旧制高等学校記念館1階ギャラリー

[料 金] 無料(常設展は通常観覧料)

松本まるごと博物館連携事業 まつもとの七夕 2019	松本市立博物館	Tel.0263-32-0133
	松本市はかり資料館	Tel.0263-36-1191
【会期】7月6日(土)～8月12日(日・祝) 【会場】各館(博物館はまちなか展示を開催)	窪田空穂記念館	Tel.0263-48-3440
	重文馬場家住宅	Tel.0263-85-5070
各館でまるごと博物館缶バッジをプレゼント! 織姫と彦星を会わせてあげよう	安曇資料館	Tel.0263-94-2134
	松本市歴史の里	Tel.0263-47-4515

松本の風物詩 ～松本のまちを彩る七夕人形・笹飾り～

松本地方には、七夕人形を軒先に飾り、ほうとうやまんじゅうを供える全国でも珍しい風習が江戸時代から続いています。博物館では今年もまちなか展示を行うほか、博物館連携事業として6館で七夕人形の展示を行います。また七夕の伝統食であるほうとうの試食のほか、七夕人形を作る講座もあります。

まちなか展示

松本駅から博物館までの中心市街地各所に、商店などにも協力してもらい、七夕人形や笹飾りを飾ります。

町屋で楽しむ七夕さま

蔵の町・中町で、城下町松本の伝統的な七夕の雰囲気味わえます。

会 場 はかり資料館
料 金 通常観覧料(大人200円、中学生以下無料)

星に願いを

記念館や空穂生家で笹や七夕人形を飾ります。

会 場 窪田空穂記念館
料 金 通常観覧料(大人300円、中学生以下無料)※空穂生家は無料

古民家で楽しむ七夕さま

本棟造りの古民家の縁側に、たくさんの七夕人形が並びます。

会 場 馬場家住宅
料 金 通常観覧料(大人300円、中学生以下無料)

紅葉の七夕飾り

会 場 安曇資料館 料 金 無 料

木下尚江生家で楽しむ七夕さま

会 場 松本市歴史の里
料 金 通常観覧料(大人400円、中学生以下無料)

関連イベント

ほうとうサービス

松本では七夕にきなこや小豆あんをあえたほうとうを食べる風習があります。この機会にぜひご賞味ください。※ほうとうがなくなり次第終了。

日 時 8月7日(水)午前10時～
会 場 松本市立博物館・はかり資料館・馬場家住宅
料 金 無料(ただし各館通常観覧料が必要)

市民学芸員による七夕人形作り講座

月遅れの七夕にむけて、色紙で簡単に作れる七夕人形を作ってみませんか。

日 時 8月6日(火)、7日(水)いずれも午前10時～
会 場 松本市立博物館
料 金 通常観覧料(大人200円、小中学生100円)

七夕人形作り講座

七夕人形キットを使って本格的な七夕人形を制作します。

日 時 7月7日(日)、8月7日(水) 各午後1時30分～3時30分
会 場 馬場家住宅
料 金 1,100円(材料費)及び通常観覧料(大人300円、中学生以下無料)

松本市歴史の里 Tel.0263-47-4515

生誕150周年記念企画展「『木下尚江』という生き方」

木下尚江は、明治2年(1869)に松本の天白町(現在の松本市北深志)に下級士族の子として生まれました。尚江は、明治9年、新校舎が完成した年に開智学校に入学。その後、松本中学(現・松本深志高等学校)を経て東京専門学校(現・早稲田大学)へと進み、卒業後は、新聞記者や弁護士、小説家として活躍しました。また、尚江は日本で最初の普通選挙運動を松本で起こしたことで知られるほか、非戦運動、娼妓運動、足尾銅山鉛毒問題など、社会的に弱い人々の立場に立って様々な社会問題に取り組みました。当時は「政府に盾突くことばかりしている」、「木下尚江を生んだことは松本の恥」と

評されることもあった尚江ですが、その考え方は生誕から150年経った現代でも通用するものでした。

そんな民主主義の先覚者であった社会運動家・木下尚江の礎となった故郷・松本での日々の足跡を辿ります。

(松本市歴史の里 学芸員 / 八木瑞希)

【会期】7月27日(土)～9月16日(日) 祝
午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
月曜休館(休日の場合はその翌日)
【会場】松本市歴史の里 木下尚江生家
【料金】通常観覧料(大人400円、中学生以下無料)



法服姿の木下尚江

ガイドコーナー

はんでんぼく

考古博物館から

☎0263-86-4710

考古学まるごと体験!!

古代へ半日タイムスリップ! 当時の人々の知恵と技術から、教科書とは違った歴史の楽しさを体験します。

日時 7月27日(土)午前9時～正午
※雨天の場合翌日延期(天候により中止することがあります)

会場 松本市立考古博物館

料金 無料

対象 小学生以上(小学校低学年の参加者は、保護者の付添いが必要)

定員 先着20人

申込み 7月9日(火)午前9時から電話で考古博物館へ

重文馬場家住宅から ☎0263-85-5070

お茶席の会

日時 ①7月28日(日)、②8月25日(日)
午前10時～正午

会場 重要文化財馬場家住宅主屋

料金 通常観覧料

流派 ①松風の会(表千家)
②おしゃれ茶道の会(裏千家)

布ぞうり作り体験教室

日時 8月24日(土)、9月28日(土)、10月26日(土)
午前10時～午後3時

会場 重要文化財馬場家住宅主屋

定員 10名

料金 各日1,800円

講師 秋山啓子氏

申込み 電話で馬場家住宅へ

時計博物館から

☎0263-36-0969

夏期特別展「明治－日本時計の近代化」

時計博物館所蔵の明治時代の時計を公開し、日本の時計の近代化の歴史について紹介します。

会期 7月20日(土)～9月1日(日)
月曜休館 休日の場合はその翌日
※8月13日(火)は臨時開館

会場 松本市時計博物館 3階企画展示室

料金 通常観覧料

歴史の里から

☎0263-47-4515

囲炉裏端でおはなし会

工女宿宝来屋の囲炉裏端で民話の読み聞かせを行います。

日時 8月18日(日)午後6時～7時

会場 歴史の里

料金 通常観覧料

対象 小学生以上(小学生は保護者の同伴が必要)

定員 30名

建築講座「松本のたてもの2019」①

地元で活躍する建築士の方々と協働で、松本の伝統的な建物を紹介する講座です。4回予定している連続講座の第1回目を開催します。

日時 8月24日(土)午前10時～正午(予定)

料金 通常観覧料

定員 30名

講師 梅干野成央氏 / 信州大学工学部准教授

申込み いずれも8月6日(火)午前9時から電話で歴史の里へ

松本民芸館から

☎0263-33-1569

演奏会「民芸館で沖縄三線(さんしん)を楽しむ会」

松本民芸館で沖縄八重山地方の民謡と三線の調べをお楽しみください。

日時 7月7日(日)午後1時30分～2時30分

会場 松本民芸館

料金 通常観覧料

演奏 沖縄音楽三線教室八重山古典音楽安室流保存会

問合せ 松本民芸館へ

体験講座「子ども民芸教室」

子どもたちが、ものづくりを楽しむ体験講座です。布を裂いて織る「裂織」と、子ども用の椅子を作る「木工」の2コースがあります。夏休みの創作に絶好の教室です。

日時 7月28日(日)午前10時～午後3時

会場 松本民芸館・下金井公民館

料金 500円(材料費)

対象 小学校高学年以上

定員 各コース 10人

講師 「裂織」山賀照子氏、「木工」竹下賢一氏

共催 長野県民藝協会

持ち物 昼食

申込み 電話で松本民芸館へ

あとがき

松本高等学校が開校して100年を迎えました。松本高等学校出身者の皆さんにお話を伺うと、「あの頃は楽しかった」とおっしゃっています。私たちが過ごしている「現在」も100年経ったら歴史になるのかもしれませんが。日々起きている出来事の一瞬一瞬を、見逃さないように大切に過ごしていきたいです。(K・I)

あなたと博物館 No.223

発行年月日/令和元年7月1日

編集・発行/松本市立博物館

〒390-0873 松本市丸の内4番1号 Tel.0263-32-0133

URL: http://www.matsu-haku.com

e-mail: mcmuse@city.matsumoto.lg.jp



印刷 川越印刷株式会社